第５部分：秦漢時代

１．河北は，秦の統一国家の版図に入る

紀元前221年，秦の始皇帝は，中国の統一後，中央集権制を強化し，経済を発展させるため，全国に同一の改革を実行した。河北は，秦王朝の東北の門戸をおさえているため，戦略上の地位は非常に重要で，改革政策は河北において全面実施された。秦は，地方に郡県制を実施し，全国を36郡に分けたが，その中の８郡が今の河北に位置した。匈奴の侵入に対抗するため，従来の秦，趙，燕の長城を連結させ，西は臨洮にはじまり，東は遼東に至る万里の長城を造りあげた。我が省の秦の長城は，張家口，承徳一帯にある。展示の中の，囲場満族蒙古族自治県の岱尹上村の秦の長城遺跡にある乾隆17年（1752年）の御題碑『古長城説』は歴史的な証拠品である。

統一の年，秦の始皇帝は，全国に「度衡石，丈尺，車の軌，書体の統一」などの措置を行い，ならびに度量衡統一の詔書を発布し，多くの度量衡の標準器を製造した。我が省の囲場満族蒙古族自治県では，以前，相次いで５つの秦の詔版鉄権（鉄製のおもり）が発見された。権は半球体で，環紐と，底部にはめ込まれた鉄錠があり，これによって，鋳造後に鉄権を標準重量となるように調整した。また，周りには秦の始皇帝の26年（紀元前221年）に頒布した詔書「廿六年皇帝尽并兼天下諸候，黔首大安，立号為皇帝。乃詔丞相状綰，法度量則不壹，歉疑者，皆明壹之」が統一後の秦の小篆を用いて刻まれている。展示品にはこの拓文があり，また，全国に流通した秦の半両銭もある。

秦の始皇帝は，統一後の十数年で五度の巡幸を行い，その第三・四・五次には河北を訪れた。『史記・秦本紀』には，（始皇）三十二年〈紀元前215年〉，秦の始皇帝が，第四次の巡幸の時に碣石山（今の昌黎県）に到達し，功績のすべてを石に刻んだことが載せられている[1]。秦王島市の北戴河には，当時の行宮がある。展示品には，1986年に発掘された秦の行宮遺跡の写真や，出土した秦の瓦，中空のレンガなどの建築遺物がある。

２．漢代の郡国制下においての河北

紀元前202年，西漢王朝が成立し，「漢は秦の制度を受け継いだ」が，秦制とは異なるものもある。中央集権的な支配のもとで，地方に「郡国制」が実行されたが，それは郡県制以外に，皇帝の一族に対して分封を行い，諸侯国を建てるというものであった。漢代前期，中央政府は，諸侯王の勢力を削減するための長期にわたる争いを行った。武帝の時，諸侯国の地盤は縮小し，権勢は大きく減少した。漢の初め，劉邦は皇子の如意を趙王に封じ，皇子の劉建を燕王とした。燕は北に位置して薊（今の北京）を中心地とし，趙は南に位置して邯鄲を中心地とした。景帝の時，趙は呉楚七国の乱に荷担したため，景帝は中山など６つの小王国に分割した。武帝の時には，いっそう削藩政策がすすみ，趙の地は７つの小王国に分けられ，燕国を加えて，河北には８つの諸侯国が存在することとなった。武帝の後，東漢の末までに，河北省内の諸侯国は変化したが，権勢は次第に弱くなり，わずかに地方の郡に相当するような，王侯の食邑程度のものとなってしまった。展示の中には，

『西漢河北域内の諸侯国の封廃変遷表』がある。

削藩廃国は，考古資料でも証明されている。満城漢墓出土の蟠龍紋壺の底に刻まれた銘（「楚大官，糟」）は，この壺がもとは西漢の楚元王劉交家の所有で，後に孫の戊が呉楚七国の乱に荷担して敗死した後，朝廷に没収され，中山靖王劉勝に与えられたことをあらわしている。また，長信宮灯の刻文中には，「陽信家」の三文字があり，この灯がもとは陽信夷侯劉揭家の所有であったことを示している。劉揭は，趙王に封じられ十四年間在位したが，その子の中意の時、景帝により国を廃された。現在，劉勝の妻の竇綰（とうわん）の墓の中より出土したこの灯は，当時非常に権勢をもった竇太后（文帝の后，劉勝の祖母）が竇綰に贈ったものと推定されている。

写真５．長信宮灯

この三十年間で，考古学者は，中山靖王劉勝及びその妻竇綰の墓（満城漢墓），中山懐王劉修の墓（定県40号漢墓）[5]，中山簡王劉焉夫婦の墓（定県北庄漢墓），中山穆王劉暢夫婦の墓（定県北陵頭漢墓），燕王劉旦の墓（北京の大堡台漢墓），常山王劉舜の墓（鹿泉市の高庄漢墓）など，両漢時代の少なくない諸侯王の墓の徹底的な発掘によって大量の一次資料を獲得し，当時の諸侯王の政治，経済などの多方面において有する特権や，彼らの奢侈生活を明らかにした。

展示では，望都県の東漢墓（一説には，東漢浮陰侯の墓）と，安平県逸家庄の東漢墓の壁画（複製）の多くを紹介した。望都県の壁画には，“辟車伍佰八人”の題記がある。「辟車」は文官の職名であり，「伍佰」は武官の職名である。また，「八人」は車の前で伴をする者である。漢の制度によると，最高の等級の“公”でわずかに八人が割り当てられるのみである。また，“門下功曹”，“門下遊激”，“門下賊曹”，“門下小吏”なども描かれているが，すべて公卿や令長の幕僚であり，外出時には車に従い，政務においては機密に関与するように，主人の最も信頼する部下であった。

安平県の壁画の中の『出行図』は威風堂々としている。４層に分かれており，上の３層の各層の主たる車は，すべて二千石相当の官秩（官の秩序）の郡太守，つまり王の臣下である官吏のものである。また，最下層は車隊の後部で，主たる車は墓主の安平王自身のものである。

展示品の中には，各墓から出土した大量の車馬の器材があり，ほとんどが金メッキや，金や銀の象嵌が施されており，王に対して定められた“青蓋（王の車に用いる青色の覆い）”，“金貨蚤”，

“金塗五末”をつけている。

諸侯王たちは，特権によって、生前は贅を極めた生活をおくり，死後は巨大で豪華な陵墓の建造を必要とした。中山靖王夫婦の墓は，山を切り開き，石を穿ってつくったものであるが，墓の中にも住居や，石板を積み上げて築かれた浴室が造られていた。また，中山簡王劉焉の墓は，墓の頂上部に巨石を積み上げており，その巨石の上には25の郡県よりやって来た石工の名前が刻まれていた。『後漢書』の記載によると，６州18郡の１万人以上が徴発されている。中山靖王の金縷玉衣は，2,498片の玉石を，1,100ｇの金糸で綴ってつくったもので，一人の玉工では10年の作業期間を必要とする。死体を永遠に保存するため，西漢，東漢時期に盛行した玉衣（別名「玉匣（ぎょくこう）」）は，納棺の際の服としてつくられ，皇帝あるいは諸侯王の等級によって，金縷，銀縷あるいは銅縷が用いられた。中山懐王劉修の金縷玉衣については，玉片には貴重な黄玉が，金糸も劉勝より太いものが用いられている。

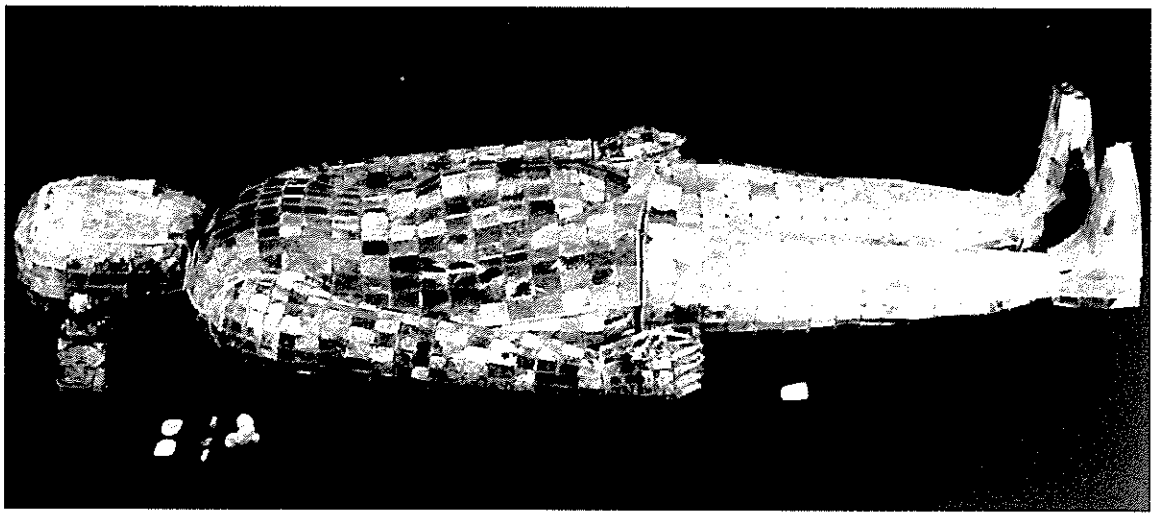


写真６．中山靖王の金縷玉衣

３．漢代の河北の経済発展

両漢時期，河北の経済はかつてない繁栄に至った。特に，漢の武帝による貨幣の独占鋳造と塩鉄の官営化の影響が大きい。

“三銖”，“四銖半両”と大“半両（秦の貨幣）”などは，貨幣の独占鋳造をおこなう前に河北で流通した貨幣であり，独占鋳造の後には，郡国および個人の貨幣鋳造は厳禁され，“五銖”銭のみ使用がゆるされた。展示品には，二つの西漢時代の五銖銭の范（銅製）がある。『西漢貨幣専鋳一覧表』は，漢初から武帝期までの貨幣の変遷の状況をあらわしている。

『西漢時期河北境内鉄官所在地』では，魏郡武安，常山郡蒲吾（今の平山県），都郷（今の井陘県），涿郡涿県，漁陽郡漁陽（今の北京市密雲），右北平郡夕陽（遷西県），中山国の北平（今の

満城県）などの７箇所に鉄官を設け，全国の７分の１を占めたことを図表した。塩官は，鉅鹿郡堂陽（今の新河県），渤海郡章武（今の黄驊市），漁陽郡泉州（今の天津市武清県）の３箇所に設けられた。展示品の中には，武安市鉱山村の漢代の官営冶鉄遺跡の写真や鉱石，金屑などがある。

度量衡は，漢代に発展，制度化され，器具の定型化が完了した。西漢末期の劉歆の『漢書・律歴志』は，我が国で最初の完整された度量衡の専門書である。満城漢墓の18点の銅器の銘文には，いずれもその器の容量と重量が記されており，西漢の度量衡制度を研究する上での重要な実物資料である。墓の中からは，“量”器では勺形の籥〈容量は，銘より“大半籥”に相当する〉が，“度”器では象嵌の鉄尺が，“衡”器では“三鈞”鉄権（三十斤を一鈞とする）が出土した。

両漢時代，鉄製農具の広範な使用，牛耕の拡大，耕作制度の完成によって，農業経営は大きく発展した。耕作の際に使用される大型の鉄製の犁の刃や鋤，新型の鉄製種蒔き車，灌漑用の水碓（模型），刈り取り用の鉄鎌，食品加工用の麻点紋の磨製石器，貯蔵の際の穀物倉（模型）などの生産工具のすべてを揃えており，設備は完全である。展示している『漢代農業科学技術の成果』の図表より，生産工具，生産技術，家畜飼育など，各方面すべてに新たな創造のあったことを知ることができる。

冶金業は一層発展したが，満城漢墓出土の鉄器は，この分野の成功を特に示している。科学分析により我が国では，今までのところ最も早い鼠銑の鋳造品が知られているが，これは脱炭素鋼法を用いて鋳造されており，同時に，熱処理技術においては，刃部に局部的に焼き入れするという新工法を取り入れていた。これは，全国をリードするものである。展示品には，満城漢墓出土の鉄車鋼，鋤内范，劉勝の鉄剣がある。また，磁県，唐県出土の鉄製の歯車（制動用）などもある。

青銅器の種類は多く，また次第に精美で実用的なものとなった。金や銀のメッキや，象嵌の技術はめざましく発展し，展示している満城漢墓出土の一対の鳥篆紋壺や，全身に繊細な金銀の糸を用いて吉祥語と動物紋を象嵌した帯は，非常に優美である。定県三盤山漢墓出土の金銀を象嵌した銅傘鋌は絶品ということができる。それには，４つの異なるテーマ（一．飛鳳長鳴，二．胡人騎駱駝，三．狩猟，四．舞象）のもとに，５人の人物と119匹の珍奇な獣が描かれており，大自然の中の生意に満ちあふれた雰囲気と，激烈に組み合って戦う場面のすべてが，詳細かつ迫真に，わずか145㎠の画面中に巧みに濃縮されて刻み込まれている。

紡績業は特に発展した。満城漢墓出土の絹織物は，それを充分に証明するものである。絹，縑（薄い絹），羅，綿など多くの種類があった。その中の羅紗の文様を織る技術は複雑で，上機時の綾織りと縦糸の縒り合わせは，二人で協力して作業しなければならず，そのうちの一人が紋様を担当する。紋錦と絨圏錦は，漢代の新品種であり，彩色された糸を用いて織られたものである。絨圏錦の技術はさらに複雑で，紡績史上においての重要な進歩である。

漢代の科学技術の成功をあらわす資料として，今まで発見されている最も早く，最も先進的な流量計時器である満城漢墓の銅漏壺がある。そして，照準部分に５度の目盛りが刻まれ，命中率を大

いに向上させた刻度銅弩機は，当時の人々が，重力と空気抵抗が矢の命中に影響することを，すでに知っていたのを示すものである。さらに，金銀の医療用の針は，漢代の『黄帝内経』を参照すると，その名称と医療効果を知ることができるが，それは祖国の医学発展史上における重要な証拠である。また，算筭（算木）は，漢代の墓でしばしば見つかる当時の一般的な計算工具であり，独特の演算方法を有するものであった。

漢代の文化芸術は豊富にして多彩であるが，河北に残っている絵画は，壁画，青銅器，陶器の器面上の紋飾，画などで，展示している望都県の壁画の中の“羊酒”の画や，満城漢墓の彩絵陶器の器面上の魚や鶴などは，技法は熟練し，線は簡潔でなめらか，形象は真に迫るものである。そして、刻み込まれた人物の性格，風格を良く表している。

書については，漢代の隷書は独特の風格をそなえている。展示品には，望都県の壁画の文字の複製や，封龍山の石碑，白石神君碑，群臣上寿石の拓本がある。“群臣上寿石”は，現存する国内で最も早い大型の石刻文字であり，非常に珍しいものである。

河北の肥沃な土地が育てた多くの文化上の著名人を図表で紹介している。漢代の大儒学者である董仲舒は，棗強の人である。展示品には，彼の肖像画がある。漢の武帝が，彼の“百家をしりぞけ，儒学のみを尊ぶ”という建議を認めたため，これ以後二千年の封建社会において儒学が正統とされたのである。

4．河北は，東漢末期の黄巾の乱の発生地

豪強な地主の勢力拡大，土地集積の進行，階級矛盾の激化によって，紀元184年，全国的な規模の黄巾の乱が勃発した。黄巾の乱の首謀者である張角は,河北の巨鹿の人である。展示には，定州市の張角の墓や，乱の大本営の遺跡の写真がある。また，東漢末期の地主の荘園をあらわした安平壁画『建築図』と，地主が塢堡の中で厳重な警備をしていたことを示す阜城県桑家楼出土の五層(実際は九層)の大陶楼を展示しているが，その高さは２ｍで，我が国に現存する最大の漢代の陶製の楼である。

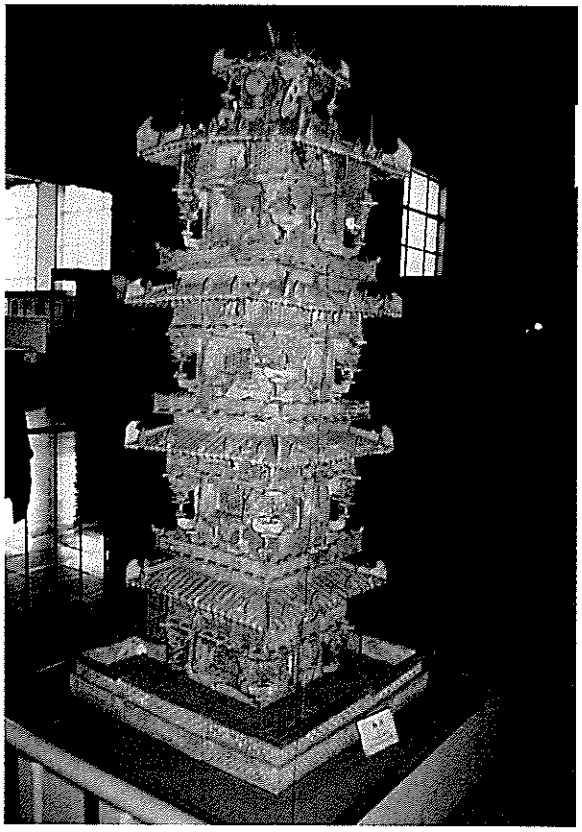


写真７．岐阜県桑家楼出土の大陶楼

第６部分：三国，両晋，南北朝時代

１．各民族政権の抗争下の河北

東漢政権の瓦解後，黄巾の乱が鎮圧される中で，豪強な地主たちは，群雄割拠の状況をつくりあげた。紀元200年，曹操は袁紹を破り，北方を統一した。展示資料の中には，曹操の河北においての業績を示した図や，鄴（ぎょう）城で築いた銅爵台の写真，曹操が軍事行動中に碣石山に登って記した壮麗な詩編『観滄海』の字句と創作画がある[6]。

紀元（ママ）前265年[7]，司馬炎は，曹魏政権を簒奪し，西晋王朝を建てた。西晋は，河北に20郡を設置し，北方少数民族に対しては安撫，消極政策を採用した。展示品には，「匈奴率善佰長印」と「鮮卑率善佰長印」の二つの方印があり，いずれも尚義県大青溝で出土したもので，戦乱中の遺物と思われる。祖逖（そてき）の「聞鶏起舞」の故事は，今まで広く伝えらた歴史物語である[8]。彼は范陽道（今の涿水県）の人で，晋末に長江を渡って北伐を行い中原を回復し，名将と評されているが，展示資料には，これを題材とする創作画がある。

十六国時代，河北において頻繁に交替した各民族の政権については，いずれも図表にあらわしている。紀元319年，後趙の石勒は，趙王と称し，襄国（今の邢台市）に都を建てたが，石虎の時，鄴に遷った。前燕後期の都も鄴に遷っている。後燕は，都を中山（今の定州市）に建てた。展示資料には，晋の石尠・石定の墓誌の拓本の一部があり，それには，石勒が流民の武装蜂起を指導したこと，郡県を攻撃したこと，鄴城を占領したことが叙述されている。また，後燕の慕容垂の墓（定州市に所在）の写真や，鄴城遺跡の瓦などもある。

北魏後期，鮮卑の支配者と貴族は，日増しに腐敗し，人民の生活苦は言うに堪えないものであった。支配者は，人民を麻痺させるために仏教を奨励して寺院を建立し，また南朝に対して，絶え間なく戦争をしかけ，大量の人力・物力を消耗した。加えて，自然災害や，階級矛盾の増大も見られた。そして、各民族の人民闘争の怒りの火に燃え移り，ついに紀元525年に杜洛周（今の懐来県にあたる上谷の人），葛栄の率いる河北人民が武装蜂起し，河北の大部分を支配下におさめた。展示品には，『洛陽伽藍記』中の北魏の支配者の荒淫・奢侈生活に対する記載や，『北魏北方六鎮と杜洛周，葛栄の武装蜂起路線図』がある。

紀元528年９月，葛栄は邯鄲の石鼓山滏口鎮で捕らえられ処刑され，武装蜂起は鎮圧された。展示品には，滏口の写真がある。人民は，彼らを記念するため，定興県の戦士合葬墓の前に木柱を建てた。後に北斉の支配者は，太寧二年（562年）に改めて石柱を建て，柱に支配者が武装蜂起を鎮圧したことを讃える長編の銘文を刻んだ。石柱は，『義慈恵石柱』と名付けられ，この時の大蜂起についての反対側からの証拠である。

北魏が東魏・西魏に分裂した後，鮮卑は漢人化し，高歓が東魏政権を支配している際，都城を洛陽から鄴城へ遷し，新たに鄴南城を建てたが，展示資料には，その平面図がある。紀元550年，高洋が簒奪し，北斉を建てた。鄴城と晋陽（山西省太原）はこのとき両都とされ，高洋はつねに両

地を往来し，その道中に行宮と仏寺を建てた。邯鄲市の響堂寺石窟や，渉県の媧皇宮[9]はいずれもこの時に建てられたものである。

古鄴城の発展は最盛期を向かえ，南北両城が並列し，宮殿は高くそびえ立ち，寺院は立ち並んだ。そして，名高い政治，経済，仏教の中心地となった。しかし，紀元577年，北周は鄴都を攻めおとし，一片の廃墟としてしまった。ただし，出土した建築材料より，当時の繁栄を推測することが出来る。鄴城は，はじめて宮苑区，居民区，商業区の区画を分けて造営された都市であるため，その後の模範とされた。

2．各民族の貴族と漢族地主の連合統治

魏晋時代，河北には，時代を動かすほどの力を持った数十家の地方豪族が出現した。建国以来，我が省では数十箇所の皇族や豪族の墓地が発見されていることが，その最も有力な実物証拠である。展示品の中には，「河北域内の豪族分布図」がある。著名なものとして，范陽の盧氏，清河の崔氏，趙郡の李氏，博陵の崔氏などがあげられる[10]。彼らは武装し，大土地を占有して荘園経済を形成し，家族墓地での族葬，厚葬を行った。景県の封氏の墓群には，全部で16の墓があり，いずれも北朝の高官として葬られている。磁県の蘭陵王高肅の墓には，北斉皇族の高肅が埋葬されているが，彼は北周と邙山で戦い，勇敢で戦いがうまく，常に仮面を付けて出陣し，しばしば戦功を立てた。著名な「蘭陵王入陣曲」は，彼の戦功をたたえたものであり，唐代に日本へも伝わったが，今も磁県で流行している。高潤（北斉皇帝高勧の第十四子）の墓中より出土した数百体の陶俑は，生前の威風や並ぶ物のない程の盛大な情景をあらわしており，また，展示ではその一部のみを紹介している景県の高雅墓では，墓主の体の周りに金箔と雲母が詰め込まれていた。

北魏の孝文帝は，太和八年から政治，経済，社会習俗などの多方面に及ぶ漢化改革を開始したが，これによって政権を強固とし，また民族の大融合を進めた。展示品には，「北魏孝文帝の各改革表」，磁県の「魏宜陽王元景植碑」（拓跋氏は，“元”に改姓），「胡，漢服装対照表」（景県の封氏墓群資料），曲陽県の「高氏墓誌」と景県の「高雅墓誌」の拓片（両墓誌は，ともに胡族と漢族の婚姻を示す）がある。資料には，懐州刺史印，高城侯印，冠軍将印（いずれも景県の封氏墓群から出土）や，軍司馬印，魏昌令印（いずれも定州市北魏石函より出土）がある。また，出土した各様式の陶俑もある。

3．回復と発展の社会経済

こうした大きな流動の時代は，また民族の大きな交流・融合の時代でもあった。各民族の人民は，大融合の中で，ともに進歩していった。曹操の屯田や水利の興修は，河北の農業を上昇させた。北魏は，均田制を実行して農桑をすすめ，農業生産を漢魏の頃の水準まで回復させた。そして，東魏・北斉期において，鄴都周辺は毎年豊作で，最も人口が多く物産の豊かな地方となった。展示

品には，北魏の清河の崔亮の製造の先進的な水碓（水力をつかった碓）の模型（中国歴史博物館の復元）や，河北中南部を含む黄河中下流の農業生産の状況を総括した，北魏の農業化学家である賈思勰の著した「斉民要術」がある。

魏晋南北朝時代は，我が国の磁器の発展において，重要な段階であった。我が省で出土する青磁の種類は非常に多い。胎質，釉薬と造形は，南方の青磁と非常に大きく異なっており，南・北方が同時に独立して発展したことを証明している。展示品には，「南北青磁対照表」がある。また，青磁以外に，黒釉と白釉の瓷器もある。展示品には，装飾が非常に美しく，造形も高大な北方の青磁の代表作である景県封氏墓出土の青釉仰復蓮花尊や，北斉の崔昂墓出土の黒褐釉四系罐，臨城県の賈村窯出土の白磁杯などがある。展示している磁器は，各様式，各種のものがあり，豊富で多彩である。

商業と手工業は，北魏の時期に発展しはじめた。鄴城の綿織物は，全国にその名が聞こえ，冶鋳，金属製造業なども向上した。貨幣は，再び流通し，辺境貿易もまた回復しはじめた。展示では，東晋の陸翽の『鄴中記』に，「錦は大登高，小登高，大明光，小明光……が有る」など，鄴城で生産される22種の錦と綈の名称と，「すべてが精巧であり，名を書き尽くすことができない」との記載を抜粋し、紹介している。展示品には，魏の孝文帝のはじめた新たな鋳造貨幣，“太和五銖”がある。展示中の絵図では，北斉の綦母懐文が造った灌鋼“宿鉄刀”を表しているが，これは我が国の冶鉄史上の一大進歩である。展示品には，三国時代に流通した“五銖”，“永安一百”や，北魏で流通した“太和五銖”，“永安五銖”，北斉で通用した“常平五銖”，西晋で通用した“太平百銭”などの貨幣がある。

北魏は，沙河市の綦陽鎮に冶鉄司を設立し，主に農具を製造した。展示品には，綦陽鎮の写真がある。

4．各民族の科学文化の交流発展

民族融合や，中国と西洋との交流，仏教の伝播によって，新たな芸術の特徴が形成された。絵画・書と仏教芸術において，特にそれが現れている。

①書と絵画芸術

北方の書は，碑銘に優れており，字体は整い雄壮で，勢いは重厚，世に『魏碑』と称し，後世に大きな影響を与えた。我が省には，少なくない代表作がある。展示品には，清代の学者に『北碑の冠』と賞賛された楊翠碑（北魏）や，習遵の墓誌（北魏），王僧の墓誌（東魏），梁伽耶の墓誌（北斉），邢河光の墓誌（北斉）などの拓片がある。

近年，磁県で東魏，北斉の大型墓の中で大きな彩色壁画が発見された。展示品には，茹茹公主墓の壁画（複製1/4）がある。内容で主要なものは，神獣や儀衛隊列，白虎で，画面は雄大にして輪

郭は豪放，高い芸術性を備えている。

②仏教と仏教芸術

仏教は漢代に中国へ伝来した。十六国時代以降，北方の政局は動揺し，戦乱が止まず，民衆は生活の手だてを失った。統治者は，自身の利益を守るため大いに仏教を奨励し，苦難の中に置かれている百姓が、神を求め仏を拝すことで苦しみを忘れるように企図した。後趙の石勒，石虎は仏教を奨励し，西域の僧侶の仏図澄（ぶっとちょう）を『大和尚』として，彼に都の襄国，鄴で多年にわたり経を講ずること，また政治に参画することを請うた。その弟子で著名な道安（冀州の人）は，河北で多年にわたり経典の講義や，仏典研究を行った。後趙の時代，寺院数は893カ所に達し，河北を北方仏教のもっとも早い発展地域とした。

展示品には，『晋書・仏図澄伝』がある。

北魏の太和五年（481年），孝文帝と母后は，中山（今の定州市）を巡察し，“官財”を用いて城の東に五重の仏塔を建立することを命じた。展示品には，定州城の北東隅より出土した石函の蓋に刻まれた銘の拓片がある。

北朝の歴代の皇帝の多くは,仏教を奨励し，窟を開き，仏像を造り，寺院を建立したため，多くの珍貴な仏教芸術品が残存した。ここでの展示の重点は，邯鄲市の響堂寺石窟の紹介にある。これは，北斉皇帝の高洋によって造営された大型石窟であり，中国仏教史の中で重要な位置を占めており，北斉の歴史や仏教を研究する基本的な資料である。石窟は，次の三カ所に分かれている。

（1）北響堂石窟は，天保年間（550～560年）の開削，三窟が建造された。

（2）南響堂石窟では，天統元年（564年）から北斉の承光元年（577年）までに七窟が建造された。

（3）水浴寺石窟（別名『小響堂』）は，武平五年（575年）の建造。

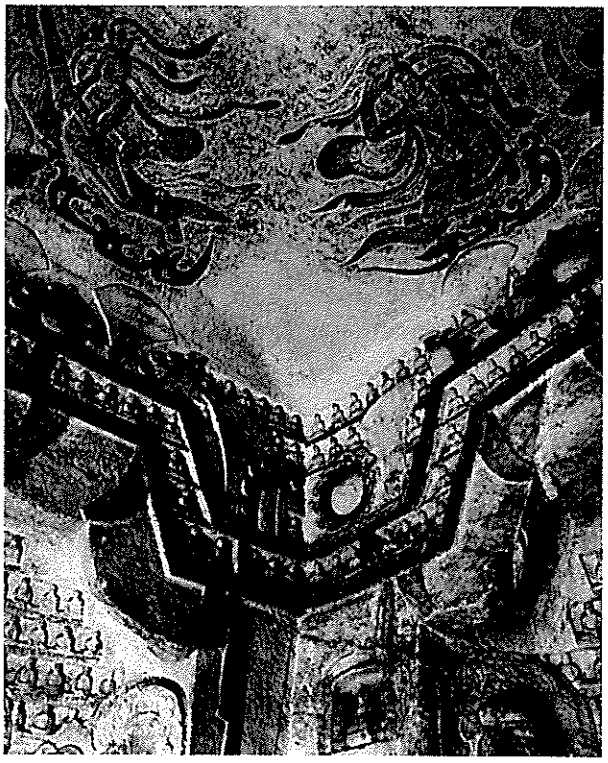


写真８　南響堂第７窟

響堂寺の石窟の中で規模が最大の三窟（大仏洞，釈迦洞，刻経洞）は，いずれも高洋によって建てられたものである。展示品には，大仏像や火炎宝珠の図案，写経碑の写真がある。

早期の仏教彫刻は，我が省で多く出土しており，我が国の仏教芸術史上，重要な地位を占めている。展示品には，鎏金帯傘蓋一仏二弟子像があるが，これは弥勒仏像であり，造型には趣がある。

1953年，曲陽県の修徳寺遺跡で出土した2200点の石刻の仏像の中には，紀年を有するものが247点あるが，それらは北魏の神亀３年より唐の天宝９年までの230年の長期にわたっており，内容は豊富で，芸術性も高く，鮮明に当時の特徴を備えており，我が国の仏教と仏教芸術史を研究する重要な科学的資料である。展示品には，曲陽県の修徳寺遺跡で出土した北魏の交脚弥勒像などがある。

仏教の盛行は、新たに寺院経済を形成したが，それは、農民より土地を、国家からは労働力を奪い，社会経済に甚だしい負担と損害をもたらした。北斉の時，寺院数は４万以上に達し，僧尼は200万人となった。展示品には，『歴代仏教寺院僧尼数量表』がある。

③中西文化交流

魏晋南北朝時代においての，中央アジアと西アジアの交流，特に仏教の発展に伴って，移動が一層盛んとなったことは非常に注目される。定州市の北魏の太和五年の石函中では，以前，41枚のササン朝ペルシャ（今のイラン）の銀貨が出土し，その中にはヤズダギルド二世（在位438～457年）のものが４枚，ベーローズ（在位457～483年）のものが37枚含まれていた。最後のものは，ベーローズの９年(ママ)[11]，つまり西暦470年のもので，時に北魏の孝文帝の即位する１年前にあたる。史料によると，孝文帝の太和５年（481年）以前の26年間に，ペルシャは５回使節を派遣しているが，その第１回目はヤズダギルド二世が，他の４回はいずれもベーローズが派遣したものである。この41枚の中には、エフタル文字が打印されたエフタル国の貨幣が１枚ある。エフタルは匈奴の別種で，西洋の歴史書では「白匈奴」とされている。エフタル国は，かつて北魏の太和二年（456年）に使者を派遣し，朝貢した。これらの銀貨は，我が国内で最初に発見されたエフタル国との関係を示す実物資料である。また、展示品にはペルシャ貨幣もある。

その他，賛皇県の李希宗夫婦墓と磁県の茹茹公主墓でも，５枚のビザンチン（東ローマ）帝国の金貨が発見されているが，これは現在のところ最も東で発見されたものである。無論，銀貨・金貨はすべてシルクロードを通過し，所有者を替えながら東海の沿岸部へ到ったものである。展示品には，東ローマの金貨や，陶製のラクダ（磁県の墓より出土）などがある。

④河北の科学文化の著名人

戦国時代に次いで，魏晋南北朝は，我が国古代科学文化の発展史上，もう一つの輝ける時期である。展示品には，『科学文化著名人一覧表』がある。古くから，文化・伝統を有する河北は，多くの優秀な人物を生み出した。祖冲之は，その中で最も代表的な人物である。展示品には，祖冲之像がある。彼は，涿水の人で，南北朝時代の最も傑出した数学者であり，天文学者であり，技術者でもあった。展示品には，『祖冲之の円周率表』がある。彼は，世界でもっとも早く円周率を少数点以下第７位まで計算した。それは，3.1415926から3.1415927までの間であり，欧州とくらべ一千年も早い。彼は，指南車，千里船，水碓磨なども発明した。展示品には，『祖冲之伝』の書籍の写

真がある。また，『大明暦』を編纂したことは，千年の後まで伝えられる功績である。ところで，当時，地理学では酈道元（れきどうげん）の『水経注』が，歴史学では魏収の『魏書』や，仏教の盛況を記載する楊衒之の『洛陽伽藍記』が著わされた。それらは，文学としても高い価値を有する著作である。展示品には，『水経注』，『魏書』，『洛陽伽藍記』がある。

おわりに

最初にも紹介したように，現在の河北省博物館の展示は歴史部門を主としたものであるが，自然部門・美術部門についても，歴史と同規模の展示施設の建設が計画されている。近年，新設された「神秘王国ー戦国中山国ー」，「金縷玉衣的故郷ー満城漢墓ー」が高い評価を得ているように，それらも最新の展示技術や研究成果を取り入れたものとなるであろう。河北省博物館は，現在も完成に向けて発展中の博物館であるといえる。

以上，拙い訳文ではあるが，本稿が河北省博物館の展示や，河北省の歴史・文化を知る一助となれば幸いである。

注

（1）河北省愛国主義教育基地資料叢書編集委員会編『河北省博物館』（河北人民出版社，1996年）。

（2）1997年に「神秘王国ー戦国中山国ー」，1999年に「金縷玉衣的故郷ー満城漢墓ー」の展示室が新設された際，「河北古代簡史陳列」の展示資料の一部がそれぞれの展示室に移されたが，基本的な展示構成は変わっていない。

（3）燕下都遺跡は，易県に所在。燕は，薊（けい）（今の北京周辺）を上都とし，紀元前4世紀に 下都を建設した。現在は，城壁の一部と宮殿の土台部，及び23基の墳墓が残存する。

（4）『史記』「巻六秦始皇本紀第六」

三十二年，始皇之碣石，使燕人盧生求羨門，高誓。刻碣石門。壞城郭，決通隄防。

其辞曰，

「遂興師旅，誅戮無道，為逆滅息。武殄暴逆，文復無罪，庶心咸服。惠論功労，賞及牛馬，恩肥土域。

皇帝奮威，徳并諸侯，初一泰平。堕壞城郭，決通川防，夷去険阻。地勢既定，黎庶無繇，天下咸撫。

男楽其畴，女修其業，事各有序，惠被諸産，久並来田，莫不安所。羣臣誦烈，請刻此石，垂著儀矩。」

（5）定県は，現在の定州市（1986年に改称）。

（6）『観滄海』の詩は，以下のとおり。

東臨碣石　以観滄海　水何澹澹　山島竦峙　樹木叢生　百草豊茂　秋風蕭瑟

洪波湧起　日月之行　若出其中　星漢燦爛　若出其裏　幸甚至哉　歌以詠志

（7）紀元265年の誤記。

（8）「志のある者が，時至って発奮努力すること」の意。『晋書』「祖逖伝」の「（祖逖）與司空劉琨俱為司州主簿，情好綢繆，共被同寝。中夜聞荒鶏鳴，蹴琨覚曰，此非悪声也。因起舞」の故事に基づく。

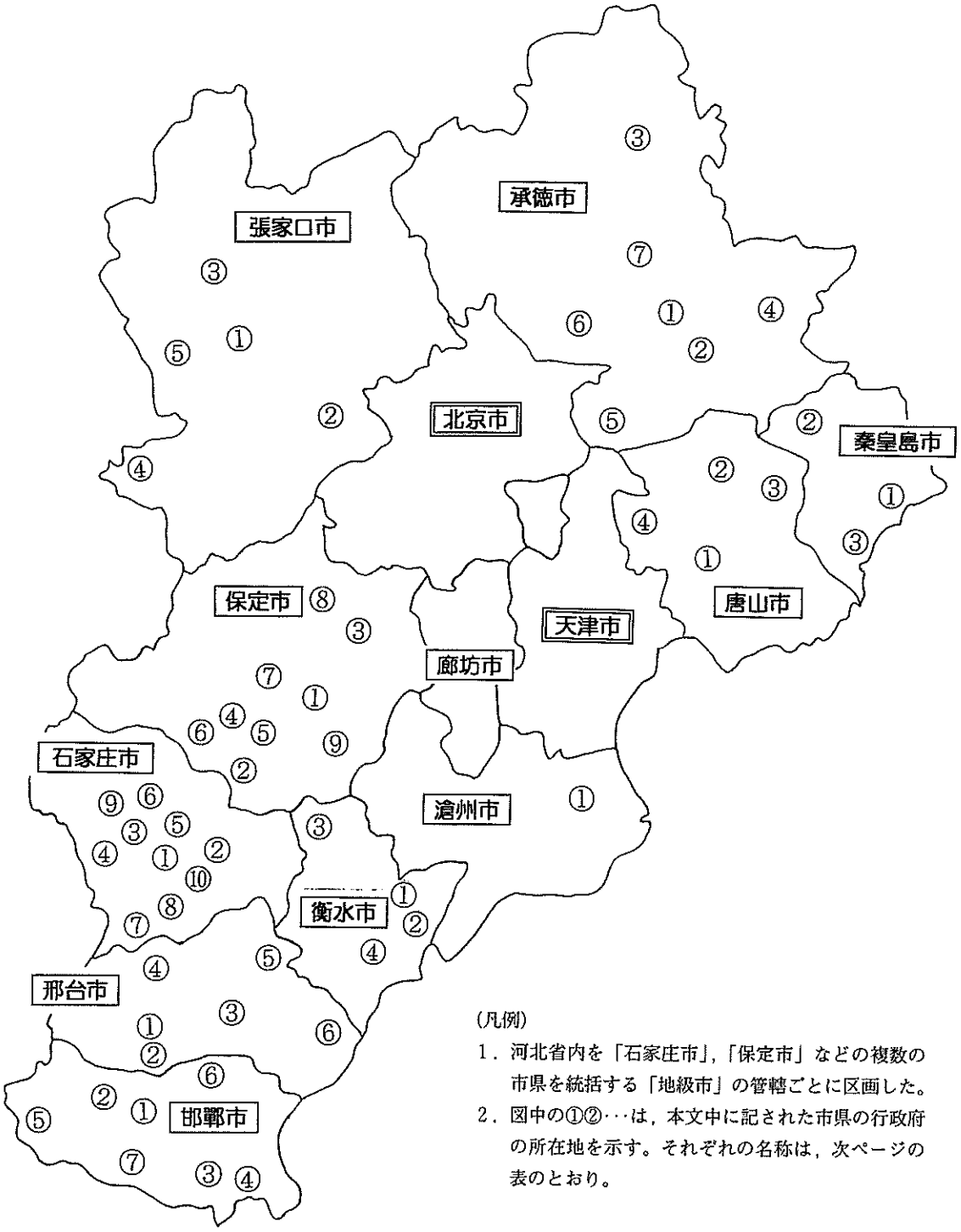
（9）渉県は，創造神の女媧が，壊れた天地を修復した場所とされる。

（10）范陽は現在の定興県及び周辺地域，清河は清河県，趙郡は趙県，博陵は蠡県の周辺にあたる。

（11）ベーローズの14年の誤記。

付　図

図は，本文中及び註に記される河北省内の市県の位置を示すため作成したものである。河北省内には，2001年３月末現在，149の市県が所在するが，本稿には，その中の57市県名が記されている。



地級市	No	市県名
石家庄市	①	石家庄市
石家庄市	②	藁城市
石家庄市	③	鹿泉市
石家庄市	④	井陘市
石家庄市	⑤	正定県
石家庄市	⑥	靈寿県
石家庄市	⑦	賛皇県
石家庄市	⑧	元氏県
石家庄市	⑨	平山県
石家庄市	⑩	趙県
保定市	①	保定市
保定市	②	定州市
保定市	③	定興県
保定市	④	唐県
保定市	⑤	望都県
保定市	⑥	曲陽県
保定市	⑦	満城県
保定市	⑧	易県
保定市	⑨	蠡県

地級市	No	市県名
邯鄲市	①	邯鄲市
邯鄲市	②	武安市
邯鄲市	③	魏県
邯鄲市	④	大名県
邯鄲市	⑤	渉県
邯鄲市	⑥	鶏澤県
邯鄲市	⑦	磁県
邢台市	①	邢台市
邢台市	①	南宮市
邢台市	②	沙河市
邢台市	③	巨鹿県
邢台市	④	臨城県
邢台市	⑤	新河県
邢台市	⑥	清河県
衡水市	①	阜城県
衡水市	②	景県
衡水市	③	安平県
衡水市	④	棗強県
滄州市	①	黄驊市

地級市	No	市県名
張家口市	①	張家口市
張家口市	②	懐来県
張家口市	③	張北県
張家口市	④	陽原県
張家口市	⑤	懐安県
承徳市	①	承徳市
承徳市	②	承徳県
承徳市	③	囲場満族蒙古族自治県
承徳市	④	平泉県
承徳市	⑤	興隆県
承徳市	⑥	滦平県
承徳市	⑦	隆化県
秦皇島市	①	秦皇島市
秦皇島市	②	青竜満族自治県
秦皇島市	③	昌黎県
唐山市	①	唐山市
唐山市	②	遷西県
唐山市	③	遷安市
唐山市	④	玉田県